

「友情のメダル」と西田修平

橋本 唯子

1 はじめに

このたびの「教養の・ある人・ない人」というテーマで、「ある人」、「ない人」をそれぞれ具体的に指し示す意図はないが、近年幸運にも調査することができた、主に二人の人物から、このテーマについて関連させて論じることとしたい。

1952（昭和27）年、『改訂新しい国語 六年上』には、「(二) 友情のメダル」という項目がある。巻末には、「本書のうち、既成作品から引用し、また、特に書きおろしを依頼した教材は左記の通りである」とあり、友情のメダルの教材作成者として織田幹雄の名が記されている。友情のメダルが初めて教科書に掲載されたのは、それより以前、管見の限りでは1949（昭和24）年『新しい国語 六年上』、発行はともに東京書籍株式会社である。

そもそも、「友情のメダル」とは何か。『日本大百科全書（ニッポニカ）』所収「オリンピック」には、「棒高跳びでは西田修平と大江季雄（おおえすえお）がアメリカのメドウズ Earle Elmer Meadows（1913-1992）と延々5時間の熱闘を演じ、2、3位を分けあった。のち両選手は銀と銅のメダルを半分に切って継ぎ合わせ、各自が所持するという「友情のメダル」が生まれた。」と記されている。

メダルを半分に割ってつなぎ合わせるという発想は極めて大胆であり、世界中に残されている歴代オリンピックメダルの中でもただ二つとあって良い。西田と大江は、なぜ、メダルを折半するという行動を取ったのか。これがなぜ「友情のメダル」と呼ばれるようになったのか。またメダルの折半と「友情」との関係性とはどのようなものか。夏季五輪だけでも数百人に及ぶ日本人メダリストの中で、西田と大江はこの「友情のメダル」というキーワードによって、その主人公として多くの人々の胸に刻まれたと言えよう。それだけに、このキーワードが何時誰によってどのように生み出されたのか、その点を繙く必要がある。それがこの稿の目的である。

2 二人の主人公—西田修平と大江季雄

まず、二人の主人公を『日本大百科全書（ニッポニカ）』から紹介しよう。

西田修平 にしだしゅうへい [1910-1997]

陸上競技棒高跳びの名選手。和歌山県出身。早稲田（わせだ）大学卒業。1932年（昭和7）のロサンゼルス、36年のベルリン両オリンピック大会の棒高跳びで連続2位に入賞した。とくにベルリン大会では棒高跳び王国を誇る



和歌山県立桐蔭高校に残された、大江が所有していたメダルのレプリカを3Dプリンターで複製し、彩色したもの

アメリカ勢3人を相手に大江季雄（すえお）とともに5時間余の死闘を演じたのは有名。優勝こそアメリカのメドウスに奪われたが、大江と2人で2、3位を獲得した。決定戦は日没と疲労のため日本関係者の判断に任され、結局、年齢差で2位西田、3位大江となった。このとき授与された銀、銅メダルを半分に割ってつなぎ合わせた「友情のメダル」のエピソードは世界の人々を感動させた。日本陸上競

技連盟理事長などを務め、64年（昭和39）紫綬（しじゅ）褒章を受章¹。

大江季雄 おおえすえお [1914-1941]

陸上競技の棒高跳び選手。京都府に生まれ、慶応義塾大学卒業。1936年（昭和11）、オリンピック・ベルリン大会の棒高跳びで、アメリカのメドウス（当時世界記録保持者）、セプトン、グレーバー、日本の西田修平との計5人で争われた決勝戦は有名。夜間照明の下、延々5時間余にわたった競技で、結局4.35メートルをクリアしたメドウスの優勝が決まった。2、3位は西田、大江の争いとなり、審査員がこれ以上競技を続けることは過酷であると判断し、順位は日本関係者間で相談して決めるという、オリンピック史上初の裁定を下した。結局年長者西田が2位となったが、2人は相談のうえ銀・銅のメダルを半分ずつつなぎ合わせて持つことにし、「友情のメダル」として話題になった。翌37年、招待されたアメリカ室内競技大会でメドウスに雪辱し、同年4.35メートルを跳んで当時の日本記録を樹立している。太平洋戦争初期、フィリピンのラモン湾で戦死²。

二人とも執筆者は石井恒男である。順位決定にかかる記述の詳細については後述する。

3 ベルリンオリンピック

ベルリンオリンピックは、「ナチオリンピック」の別名で知られているように、ナショナリズム昂揚における多様かつ壮大な仕掛けがなされ、ある意味で「成功」した特筆すべきオリンピックである。ベルリンオリンピックが現代オリンピックにもたらした功罪は、既に多く指摘されている。当初はオリンピックに一切関心を示さなかったヒトラーをして、「可能なあらゆる方法で、オリンピックとすべて

のスポーツに対する関心を強めよう」と言わしめた³ことには無論根拠がある。それは、オリンピックがナチス・ドイツにとって「最初の大規模な国際的ショー」であり、国内に対しては「ドイツ国民の心を掴むための、ナチ体制の「精神的動員」の重要な部分」となることが彼らに見いだされたからであり、実際にその目論見通りに事は運ばれた⁴。

4.1 西田と大江の描かれ方—『民族の祭典』

西田と大江の物語がベルリンオリンピックにあったことは、「前畑ガンバレ」で記憶に刻まれる前畑秀子（現：橋本市生まれ）の奮闘が時代背景を反映していたと指摘されることに比して⁵偶発的である。しかし、「プロパガンダ」という汚名を着せられることも少なくない、公式記録映画『オリンピア』の中で、前畑ではなく西田と大江が多く登場している点について、ここで触れなければならないであろう⁶。

『オリンピア』は、『民族の祭典』・『美の祭典』という二部作で構成されている。監督はレニ・リーフェンシュタール。ヒトラーとの関係性などから戦後苛烈な批判にさらされるが、一方で当時から現代にわたってその芸術性が高く評価される⁷、数奇な運命を背負った映画監督である。西田と大江はこのうち『民族の祭典』に登場する。

ここではあまりに多岐にわたる論点を提供する『民族の祭典』について全面的に論じることは不可能であるため、リーフェンシュタールが西田と大江をどのように描こうとしたか、そこにどのような意図があったかに絞って論を進めることとする。まずは、『美の魔力』から、撮影の状況を概観する。

このうち棒高跳び決勝は、全体が演劇的に構成されており、〈演出〉と気づく人が多いだろう。選手も不自然な縁起を強いられ、カメラもそれまでになかった近距離——スタートを切る選手を足もとから撮影するといったような——から彼らをとらえる（略）。なお、このとき、最初に昼間の競技場での跳躍を紹介されたときの大江はたしかにゼッケンをつけていたのに、〈再現〉の部分の彼の背中にはそれが見えないのが面白い。意図的かどうかは不明だが、大江は〈再現〉ではいっさいゼッケンをつけずに登場しているのだ⁸。

つまり、棒高跳び決勝の画像は撮り直されているのである。詳細は沢木耕太郎の筆による『オリンピア』に依拠すると、次の通りである。以下長文となるが引用する。

ところで、西田と大江にとっては翌日の表彰式がベルリン大会の棒高跳びにまつわる最後の儀式とはならなかった。彼らにはまだやらなくてはならないことが残っていた。記録映画を作っていたレニ・リーフェンシュタールか

ら、最後のシーンを撮り直したいので、もういちど跳んでくれないかという要望があったのだ。

二人は承諾し、カメラの前に立った。

しかし、それはレニの「その翌日、同じ場所で、同じ高さで跳び直してもらった」という記憶とは掛け離れたものだった。

西田は言う。

「だって、考えてもみなよ、次の日はまだ競技が行われていたんだから、いくら夜だといったって、撮り直しなんかできるはずがないよ」

これはおそらく西田の方が正しい。単に当事者の記憶だからというだけではなく、客観的に判断して、その翌日に撮り直すことは不可能だと思われるからだ。

撮り直しの際、レニが出す「そこでバーを引っかけて」とか「今度はきれいに跳んで」といった指示を、西田と大江に通訳したのは三段跳びの田島直人だった⁹。

ここでは異様な執着心で、長時間に及んだ熱闘の末にもかかわらず撮り直しを命じる監督・リーフェンシュタールの姿が証言されている。詳細を確認すれば画像には後日の再撮影が含まれていることが明白であり、当然事実との乖離が問題視されるはずであるが、その点においてリーフェンシュタールには躊躇いがない。しかしこの映画においてリーフェンシュタールが追究したものは、「事実を伝えること」よりも「人間を美しく描くこと」だったと理解すれば、逡巡がないことにも納得がいく。

改めて、棒高跳び決勝の映像を見ると、確かに引き締まった表情、腕の運び、筋肉のしなり、これらは彼らの肉体美を描ききるに十分である。ちなみに、この映像の中で西田と大江両選手が特別に友情の絆を深めていることが示された表現はない。

4-2 西田と大江の描かれ方—当時の日本における報道

オリンピックに関わるメディアの果たした役割についても、既に数多い研究の蓄積がある。日本においては、有力新聞社の海外進出を嚆矢とした1908(明治41)年ロンドンオリンピック報道が始まりとされ、選手団を派遣した1912年ストックホルム大会以後急速に拡大した。各社は競って最新通信技術を各大会に投入し、ベルリンでは初の実況中継が行われる。その中継手段として、ベルリンではそれまで活用が限られていたラジオの普及が、有名な「前畑ガンバレ」の逸話を生んだ。ナチス・ドイツも国家の威信をかけて放送設備を準備し、前述『民族の祭典』封切りにみられるように、オリンピックは「見る」もの、かつ大衆の娯楽へと変

貌を遂げつつあった。ここでは西田と大江の闘いがどのように伝えられたか、当時の新聞報道を基に確認することとする。

たとえば『読売新聞』では、1936年8月7日付け夕刊に記事が掲載されている。「闇に唱う万歳」と題した西条八十の詩¹⁰とともに、長時間の熱戦であったことなどが強い興奮をもって伝えられた。

また、『東京日日新聞』では、ベルリンの在留邦人が「約二千の日本人が五日の夜は皆祝杯だ「明日はシヤンパンにするぞ」と、はじめ三日間黙り込んでゐた人々はすっかり溜飲を下げて人を突き飛ばすやうにして街をのしてゐる」などと熱狂する様子を伝えている¹¹。

ところで、実際に闘った二人はどのような面持ちだったのだろうか。同じ日の新聞には、周囲と比較して極めて冷静な選手二人のコメントが掲載されている（当該部分は次項において引用する）¹²。長時間の競技によって疲労困憊であること、ともに落ち着いた性格であることに加え、決勝の結果が明確ではないこともその一因であることが推測される。この点について次に述べたい。

5 順位決定をめぐる

西田と大江の記録は、4メートル25。同記録となることの多い棒高跳びでは、この場合試技数の少ない競技者がより上位につくことが現在のルールブックでは決められている¹³。しかし、これはルールが厳格化されている現代においてであり、ベルリンオリンピックではあいまいな決定となったようであり、それが事の発端である。ではどのように決定されたのか。冒頭に示した、1949（昭和24）年の国語教科書には、次のように記されている。

二三等の順位決定は、西田、大江両選手の間で行われるはずでしたが、大江選手は、二位を先ばい西田選手にゆずりました。このことが場内のマイクから放送されると、大観衆はふたりの美しい友情に、再び、われるようなはく手をおくりました¹⁴。

これによると大江は年長者である西田に二位を「ゆずった」ことになる。このことが「友情」の根拠となっている。

ところが、これも本人たちの言によると、次のようである。

なほ私達の順位については今のところ決定してゐない、内輪同士で決めるのだからどうなつてもよいが、メダルだけは二人の記念のために日本に帰ってから二、三等のメダルを半分に割りそれを縫ぎ合せて一つにして各自が持ちたいと思つてゐる（『朝日新聞』1936年8月7日付け記事）

大江選手談 私達は二等であると同時に三等でもあるのです、だからメダルは二人で銀とブロンズを半分づゝ分けるとにしました、今でも元気です

(『読売新聞』夕刊、1936年8月7日付け記事「残念、寒かった」西田、大江両君語る)

この両者の試合直後と思われるインタビュー記事を読むと、「譲った」という表現は見当たらない。この点について、沢木『オリンピア』は次のように記している。

四メートル十五が跳べなかった九人を、順位決定戦をせずに全員六位としたように、西田と大江を二人とも二位にしてくれるだろうと思っていた。ところが、公式発表では試技数の少なかった西田が二位になり、大江が三位になっているそれはおかしなことだった。もし、どうしても序列をつけなければいけないのなら、審判員は西田の申し出を却下して試合を続行すべきだったのだ。(略)「友情のメダル」として修身の教科書に載るような美談として伝えられることになるが、少なくとも西田にとっては心外なことだった。二人のあいだで二、三位の決着がついていない以上、どちらがどちらのメダルをもらうか決めることはできない。だから半分ずつにしたに過ぎない。ごく単純な物理的作業だったのだ。(『オリンピア』)

順位決定方法については他にもさまざまな記述があり、結局どれが「事実」で、またどれが「正しい」のか、定かではない¹⁵。

6 「友情のメダル」誕生

既述したように、棒高跳び決勝は『民族の祭典』や当時の新聞といった各種媒体によって様々な「伝えられ方」をしているが、日本人にとって特に西田と大江の名が記憶に刻まれたのは、「友情のメダル」というキャッチフレーズによってである。この言葉がなければ、二人は膨大なメダリストの歴史の中で忘れ去られたといっても過言ではない。しかし、当の本人、特に戦死した大江に代わり当時について語り続けた西田にとっては、「あれは世間が騒いだけ。オレは何とも思っちゃいないんだ。」というものであった¹⁶。話題の広がり方が意に沿わないことを暗にうかがわせる言葉である。

本人の意向ではないとすると、いつ誰がこの「友情のメダル」というキャッチフレーズを発明し普及させたのか。本稿の冒頭に戻る。1952(昭和27)年、『改訂新しい国語 六年上』巻末には、友情のメダルの教材作成者として織田幹雄の名が記されている。

またそもそも、「友情のメダル」というキーワードが作り出されたのは、ベルリンオリンピック時ではない。メダルがいつ折半されたのかは不明だが、少なくとも戦前にこの語が記された資料はない¹⁷。管見の限りでは初見は『少年グラフ』(1947)、「スポーツものがたり 友情のメダル」、筆者はやはり織田である。織田は西田にとって早稲田大学の先輩であり、西田の才能を見出した人物である。

なお、国語教科書にはこの「友情のメダル」が1958年まで継続して記載される。年を追うごとに叙述は徐々に拡大され、「先輩のために譲った」という行為が二人の大きな感情をともなったものとなる。大江が譲り、西田が固辞した後折半は西田が提案し、「なにも、そんなことをしなくたって。」とはにかむ大江に対し、「いや、ちがう。きょうの友情の印に、世界でめずらしいメダルを作って、ぼくのむねにかざっておきたいのだ。」と西田が告げる、といった展開を見せる¹⁸。

7 おわりに

ベルリンオリンピック棒高跳び決勝の様子が、西田と大江の「友情のメダル」というストーリーが付加されることによって、後世のひとびとの脳裏に刻み込まれた影響は極めて大きい。しかもそれは試合直後とは別の形で戦後、織田幹雄が名付けた文章を基に教科書によって蘇ったものである可能性が高い。

たとえばリーフェンシュタールは、「友情」などには目もくれず、ただ肉体の美しさを表現することのみ焦点を当てて二人を描いた。そのためならば手段を選ばず、撮り直しを紛れ込ませるなど、記録映画として評価するには困難な要素を持つ¹⁹。

さらに時を経て、手塚治虫による壮大な歴史漫画『アドルフに告ぐ』（1983）冒頭において象徴的な導入として棒高跳び決勝が描かれていることもここに記しておきたい。しかし手塚の描写にはリーフェンシュタール同様、「友情」は描かれない。

「前畑ガンバレ」しかり、アスリートにとって大きな舞台であるオリンピックにまつわる「美談」は、うたかたの「感動の名場面」である。少なくともメダルの折半という行為が二人の友情を直接的に示すか否かは、再検討すべき点がある。しかし戦後、西田は足繁く大江の故郷舞鶴に通い、大江を顕彰する活動を支え続けていて、その足跡は西田の故郷那智勝浦よりもはるかに多く残されている²⁰。

本当の「友情」とは何か。残された資料から事実を見出す力を持つことによって、我々は「教養のある人」に近づくのではないだろうか。

¹ 『日本大百科全書（ニッポニカ）』所収、「西田修平」より。なおこの項目には記載されていないが、和歌山県師範学校附属小学校（現：和歌山大学附属小学校）を卒業している。

² 同上「大江季雄」より。

³ デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック1936』（白水社、2008）、P96より。

⁴ 同上P19より。

⁵ 「日本のスポーツは、個人が楽しむものでなく、まず体育になる。体育として強制され、みんなが体を鍛える。それが国歌のためになり、強い兵隊をつくることにもつながっていたんです。／そういう流れのなかで、日本が軍国主義化し、「国家のスポーツ」という思想が強烈に打ち出されてきたのが、前畑さんの時代だったということです。不幸な時代でしたね。（略）／とにかくがんばるぞという根性というか、精神主義で、長く水の中で練習しつづけた。ところが、水中は重力がなく、浮力がありますから、どれだ

け長時間練習しても、体の関節や筋肉を痛めなかった。それが水泳日本を生んだのです」(『その時歴史が動いた5』、2001)

⁶ 「日本では1940年(昭和15)夏に『民族の祭典』が公開されて記録的な興行的成功を収め、数か月後の『美の祭典』公開に際しては配給会社によって、前畑秀子(まへはたひでこ)が制した女子200メートル平泳ぎ決勝のニュース映像が挿入された。」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』所収「民族の祭典/美の祭典」より。)つまり前畑の場面は本編では割愛されていたのである。

⁷ 『オリンピア』は1938年に4月20日、ヒトラーの誕生日に初上映され、同年ヴェネツィア国際映画祭で最優秀作品賞を受賞。

⁸ 瀬川裕司『美の魔力』(バンドラ、2001)、P22より。なおゴシック体は本文ママである。

⁹ 沢木耕太郎『オリンピア』(集英社、1998)、P100より。

¹⁰ 西条八十「闇に唱ふ万歳」(『読売新聞』昭和11年8月7日付け記事、夕刊)より。なお作中の藤原義江とは、日本のオペラ運動の先駆者となったテノール歌手である。「1 時刻はすでに九時すぎて/夜の闇深しスタジアム/寒し 冷たし 風荒し。/2/数多の選手みな落ちて/残るはわづか日と米/火ばなを散らす接戦の/照してすぎ照明塔。/3/天そ、り立つ恐ろしき/空の横木を虎のごと/メドウは今し跳び越えぬ/あ、同胞は勝たざるか。/4/異国人へ 頼もしや/知るも知らぬも口々に/西田、大江の名を呼ぶに/涙は頬を流れたり。/5/敗れて落ちぬ 一度 二度/されどこのま、止むべきや/意気と力の兄弟に/奇蹟はつひに現はれぬ。/6/唇かみて土を蹴り/大江は若き鮎のごと/高き横木を跳び越えぬ/つまく西田も 嬉しめた。/7/寒さと飢ゑを忘れはて/藤原義江とわれ二人/闇に唱へし万歳や/あ、感慨のスタジアム。」ここで西条は西田と大江を「兄弟」と表していることに注目したい。

¹¹ 『東京日日新聞』昭和11年8月7日付け記事、夕刊「伯林の日本色 喜びの夜の在留邦人」より。

¹² 『残念、寒かった』西田、大江両君語る(『読売新聞』昭和11年8月7日付け記事、夕刊)など。

¹³ 日本陸上競技連盟公式サイト(<https://www.jaaf.or.jp/about/rule/>) (最終検索日:2021年1月7日)より、陸上競技ルールブック2020 第4部フィールド競技 A高さの跳躍 第181条 8順位 によると、「もし二人以上の競技者が最後に越えたのが同じ高さだったとき、順位の決定は以下の手続きで行う。

(a) 最後に越えた高さで、試技数のもっとも少なかった競技者を勝者とする。(略)

¹⁴ 『新しい国語 六年上』(東京書籍株式会社、1949)

¹⁵ たとえば、東京都歴史文化財団、東京都江戸東京博物館編著『江戸のスポーツと東京オリンピック』(東京都江戸東京博物館、2019)には、「かし風雨の中続いた長時間の競技で披露は限界に達していたため、2人は競技の中止を決め、記録上は先にクリアしていた西田が2位となった。」とある。またベルリンオリンピックの公式記録である、『The XIth Olympic Games Berlin』(1936)には、次のように記されている(訳は筆者による)。

In the jump-off where the bar had to be lowered to 4.15 m, Sefton did not clear this height, although the two Japanese competitors were successful. The second and third places were not awarded to the two Japanese after another jump-off, but at the command of the Japanese team leader, who gave Nishida the second place, since he had succeeded in clearing 4.25 m, in the first trial, while Oe required a second attempt.

バーを4.15mに下げなければならなかったジャンプオフでは、セフトンは2人の日本人のライバルが成功したものの、この高さをクリアしませんでした。2位と3位は再びジャンプオフの後、2人の日本人に与えられませんが、西田に2位を与えた日本チームリーダーの指揮で、最初のトライアルでは4.25mのクリアを獲得し、大江は2度目の試みを必要としました。

The Japanese, Nishida and Oe, both jumped 4.25 metres. The Japanese team leaders awarded Nishida second and Oe third place.

日本人の西田と大江はともに4.25メートル飛びました。日本のチームリーダーは、西田に2位、大江に3位を与えました。

¹⁶ 『男の背中4西田修平』(『中央公論』108-5所収)。ちなみにここには、大江に渡したメダルを「しばらくして大江氏のお兄さんが銀・銅のメダルを半分ずつつないで持参」し、「戦後、戦死した大江氏の遺品から出てきて、初めて世に知られる」とある。

¹⁷ なお、初稿提出後に「祖国に捧げた責任感 世界に印象づけた“友情”」とした記事を確認した。これは1942年11月19日付け『読売新聞』記事である。大江の戦死とともに選手としての活躍を伝えたものとなっている。「西田修平君と二、三位をゆづり合つた“分割メダル”は全世界に“大江の友情”を印象づけた」とされている。「友情」「譲る」といった表現がみられる初出である。戦死した大江を称える「美談」が、戦後の「友情のメダル」へと変化する起点とみられるべきであろう。さらに調査を進める。

¹⁸『改訂版国語の本 五年 上』（二葉株式会社、1952）。なお、この前には大江が監督に「かんとか、すみませんが、この競技はやめさせてください。西田さんは、私の大先ばいです（略）」と頼み、西田が「いいえ、それはいけません。大江選手はわかなくて、まだまだしょう来のあるひとです。（略）二位は、大江君にあげてください。」と主張する、というシーンが描かれている。

¹⁹一方、明確に『民族の祭典』を「参考試写」し、「全然関係ない」ものを目指したという市川崑の『東京オリンピック』（1965年）は、選手のみならず「役員とか掃除する人だとか」を含めた様々な「人」の感情を映像から描き出した点で対照的だったといえよう。（市川崑×沢木耕太郎「映画とオリンピック」（石井正己編『1964年の東京オリンピック：「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか』（河出書房新社、2014）所収）。なお市川はリーフェンシュタールの撮り直しについて「僕は僕なりに感じたオリンピックを映画として撮るわけだから、競技としての後撮りは一切すまい」と述べている。

²⁰『広報まいづる』No.381（1984）には、舞鶴市総合体育館に「大江季雄選手顕彰像」を作成したことが記されている。この原型は1942年に松木庄吉によって製作され、行方不明となっていたが、「大江選手の遺族や西田修平さんに、新聞記事のコピーなどを送り、東京の体育施設などに保存されていないか、調べてもらっていた」ところ、西田から「『胸像の実物が、慶應大学にある』との知らせが入ったという。1982年には大江の母校西舞鶴高校に銅像が建立され、この際の式典にも西田は駆けつけている。